

短茎小菊の省力栽培の実証

農業技術振興センター企画情報部

【普及活動のねらい・対象】

短茎小菊は、主に花束加工会社で仏花の素材として使われます。価格は安定していますが、低コスト生産が必要です。省力栽培が可能な短茎小菊は、大規模農家も導入を検討されるようになり、機械装備を有効に利用した省力栽培技術が必要となっています。

そこで、省力栽培技術として、全量基肥と耕耘畦立てマルチ張り同時作業、乗用2条野菜移植機による定植、乗用管理機による防除、ヘッジトリマを装着した草刈機による一斉収穫、花用下葉取り機による出荷調整作業の実証を甲賀市水口町北脇の水田で行いました。

【普及活動の成果】

(1) 実証ほの概要

- ・実証ほ場面積：22 a
- ・品種：8月咲き小菊（品種名：「ふくろう」）
- ・挿し芽：4月26日、定植：5月20日（摘芯は定植前）
（条間40 cm株間12 cm 2条植え）
- ・一斉収穫：8月11日

(2) 主な実証技術による労働時間の削減効果

- ・緩効性肥料による全量基肥施用と、耕耘畦立てマルチ張り同時作業により、定植準備は22時間/10a（慣行36時間）となりました。



●乗用2条野菜移植機による定植作業は3人組作業で行い、50m畝1本を15～20分で定植できました（上写真）。ハサミによる定植前摘芯と、移植機による定植作業により定植・摘芯の労働時間は慣行栽培の1/4に削減できました。

●乗用管理機による防除は、巾の広い通路や枕地を設けたこと等により、ほ場利用率は46%となりましたが、実作付面積10aあたり12分で薬剤散布できました（左写真）。

●ヘッジトリマを装着した草刈機による一斉収穫は、刈り倒し、収集、ほ場外への運搬までの一連の作業に要した労働時間は13～16時間/10aとなり、慣行栽培の1/4に削減できました（右写真）。

●実証した省力化技術により、総労働時間は269時間/10a（慣行412時間）となり慣行の65%に短縮できました（H23実証ほの労働時間は、実証ほ場22アールほ場において、ほ場利用率46%の作付で、実作付面積当たりの労働時間）。

